月刊みんぱく

2022年
8月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和4年8月1日発行 第46巻第8号通巻第539号

国立民族学博物館
National Museum of Ethology

©Injinaash, Bor

特集 世界に広がるヒップホップ・カルチャー

ヒップホップ、あるいは世界を映し出す鏡　島村一平
「なぜ？」――カメルーンを生きる者たちの届けられない歌　矢野原佑史
インドネシア、拡張するラップ・シーン　金悠進
セルビアにおけるヒップホップ史概観　上畑史

月刊みんぱく
2022年
8月号

目次

1 エッセイ　千字文
ローカルとグローバルが混濁した場所で
磯部 涼

特集
世界に広がるヒップホップ・カルチャー

2 **ヒップホップ、あるいは世界を映し出す鏡**
島村 一平

4 **「なぜ？」**
――カメルーンを生きる者たちの届けられない歌
矢野原 佑史

6 **インドネシア、拡張するラップ・シーン**
金 悠進

8 **セルビアにおけるヒップホップ史概観**
――リアル、ローカル、仮想敵
上畑 史

10 みんぱく回遊
街角の雰囲気醸すキオスク
小林 直明

12 みんぱくインフォメーション

14 ○○してみました世界のフィールド
フィールドワークと食
岡田 恵美

16 コレクションあれこれ
成長し続ける梅棹アーカイブズ
飯田 卓

18 シネ倶楽部 M
人気絶頂期に命を絶った若きカリスマ・ラッパー
――「お前は神だ」
平井 ナタリア恵美

20 ことばの迷い道
言語学とーちゃん、娘のお友達の名前を勝手に分析
川原 繁人

21 編集後記・次号の予告

表紙
ライブ中のモンゴルのラッパー、デサント（Desant）
（撮影：B.インジナーシ、モンゴル、ウランバートル市、2021年）
©Injinaash, Bor

エッセイ 千字文

ローカルとグローバルが混濁した場所で

磯部（いそべ） 涼（りょう）

ごくごく、ローカルな話をしたい。それこそがグローバルな、あるいは普遍的な話になるという確信を持っているからだ。

二〇一五年、私は神奈川県川崎市の南端に位置する川崎区の取材を始めた。近年は駅に隣接した巨大なショッピングモールが買い物客を集め、周囲にそびえ立つタワーマンションの価格が高騰している。しかし、もともとは工場地帯で、駅前の繁華街には労働者のための「飲む（酒場）・打つ（賭博）・買う（売春）」が揃う（そろう）「柄の悪い」場所として知られていた街だ。そして同年に起きたふたつの事件が、再開発によって覆い隠されていた記憶とそれに続く現実を掘り起こした。

二〇一五年二月、街に沿って流れる多摩川（たまがわ）の河川敷で、暴行を受けた少年の遺体を地元住民が発見。続く五月、駅から少し離れた場所にある安価な宿泊施設――いわゆる「ドヤ」で火災が発生し、二人が死亡、一七人が負傷。前者は少年グループ内の関係がこじれた末の事件であり、加害者の中に他国にルーツを持った者がいたことから、街中で排外主義を掲げるデモが頻発するきっかけになった。また、後者の事件は被害者の多くが生活保護を受給する高齢者だったことが驚きを持って報道された。言わば「彼ら」は、かつて工場地帯の発展を支えた移民労働者の子供たちであったり、日雇い労働者の年老いた姿であったりしたわけだ。

私がそれらの事件を追う中で出会ったのが、BAD HOP（ホップ）というラップ・グループだ。十代のメンバーたちは川崎区で生まれ育った幼馴染（おさなな）みで、彼らもまた寂れゆく工場地帯の子供たちだったし、同地の「飲む・打つ・買う」を仕切るアウトローを頂点とした不良社会の抑圧の中で生きていた。

当時、そんなBAD HOPがのめり込んでいたのが「ドリル」という、アメリカにおいて最も治安が悪いとさえ言われる地区＝シカゴのサウスサイドで生まれたラップ・ミュージックだ。彼らはその緊迫感のあるビートと殺伐とした内容のライムに共感していた。日本のメインストリームのポップスよりもずっと。これはまるでオレたちの街の歌だと。やがてそれを消化する内に、本当の、川崎サウスサイドの歌が生まれた。BAD HOPの楽曲は広く聴かれるようになり、同じような抑圧の中で生きる日本中の若者たちに希望を与えた。

再開発、移民、高齢化……川崎区が抱えている問題は、世界中のどの街にでもあるような問題だ。そして今、それらの街で生きる若者たちは必ずと言っていいほどラップ・ミュージックを聴き、歌っている。しかしひとつとして同じ歌はない。私たちは同じ問題の中にいて、同じ音楽を使って、自分にしか出来ないやり方で外へ出るのだ。

プロフィール
1978年、千葉県生まれ。ライター。閉塞した環境の中でラップ・ミュージックやスケートボードに生きる意味を見出だしていく若者たちを追った『ルポ 川崎』（サイゾー、2017年）は新潮ドキュメント賞の候補となった。その他、共著に『ラップは何を映しているのか ――「日本語ラップ」から「トランプ後の世界」まで』（毎日新聞出版、2017年）などがある。

特集

世界に広がるヒップホップ・カルチャー

ノリのよいラップ・ミュージック、街に見られるカラフルなグラフィティ・アート。これらヒップホップ・カルチャーは若者を中心に現在、世界中に広まっている。なぜ若者はヒップホップに惹きつけられるのか、またそれはどんなメッセージを発しているのだろうか。

ライブで歌うモンゴルのラッパー、デサント（Desant）（撮影：B.インジナーシ、モンゴル、ウランバートル市、2021年）　©Injinaash, Bor

ヒップホップ、あるいは世界を映し出す鏡

島村一平（しまむらいっぺい）
民博 学術資源研究開発センター

世界に拡散するヒップホップ

今、ヒップホップが熱い。一九七〇年代、ニューヨークのブロンクスの黒人たちによって始まったこの文化運動は、瞬く間に広がり、世界中のストリートを席巻している。そもそもヒップホップは、DJ、ラップ・ミュージック、グラフィティ・アート、ブレイクダンスの四つのエレメントから成る文化の総称である。世界に広がるこのヒップホップ・カルチャーは、単にアメリカ発の文化が各地で受容されていることを意味するわけではない。それぞれのローカルな文化と融合をとげながら、世界各地で独自のヒップホップ・カルチャーが生み出されているのである。

例えば、ラップ・ミュージック。あの韻を踏みながら早口でまくしたてるような音楽は、今や世界中の若者に聴かれているだけでなく、それぞれの国や地域の言語で実践されている。ナイトクラブでは、自由自在にビートを切り貼りして新しい音楽を生み出すDJたちが世界中で活躍している。DJミキサーに二台のターンテーブルをつなげて、自在に音楽を切り貼りする「ブレイクビーツ」やレコードを引っ掻いて逆回転させる「スクラッチ」。今となっては、古典的なDJワークだが、元はといえば、七〇年代のニューヨークのジャマイカ移民たちが生み出したヒップホップならではの技術だ。

またスプレーでストリートの壁を彩るグラフィティ・アートは、今やアメリカだけの専売特許ではない。頭を地面につけて回転するアクロバティックな「ヘッドスピン」を練習する若者の姿を見たことのある読者も少なくないことだろう。あれもじつは、ヒップホップのサブジャンルであるブレイクダンスの技のひとつだ。

グラフィティと高層マンション（モンゴル、ウランバートル市、2017年）

ヒップホップの国、モンゴル

わたしは、昨年、『ヒップホップ・モンゴリア――韻がつむぐ人類学』（青土社、二〇二一年）という本を上梓した。驚くことにモンゴルでは、人口三四〇万人ほどの国なのに、YouTube動画再生回数が数百万回を超えることもめずらしくないほどヒップホップの曲が流行している。なかには再生回数が一〇〇〇万回を超える曲すらある。さらにモンゴルでは、ヒップホップが「固有の文化」とよべるぐらい進化をとげている。モンゴル語は、子音が三つ以上連結することもめずらしくない。それによってモンゴル語ラップは英語ラップに匹敵するような速さとリズム感、そして韻踏みの技術をもっている。またペンタトニック音階のビートに合わせてラップすることも少なくなく、エスニック・ヒップホップの様相すら呈している。レゲエがジャマイカという国の代名詞であるように、ヒップホップがモンゴルの代名詞だといわれる日も近いのではないか、と思えるぐらいである。

その背景には、複雑な韻踏みを特徴とする口承文芸の伝統があった。この韻踏みの伝統は、学校教育にも引き継がれている。ただしヒップホップ・カルチャーがざわめく国であるといった場合、単に文化現象として盛り上がっていることを意味するわけではない。そもそもヒップホップはアメリカの黒人たちの社会矛盾に対する叫び声として始まった。モンゴルにおいてもヒップホップが支持されるのには、それだけ貧富の格差などの社会問題が前景化していることがあげられる。モンゴルのラッパーたちは、鋭い批判精神で貧富の格差や政治の腐敗を抉り出している。

ヒップポップのライブで盛り上がる若者たち
（撮影：B.インジナーシ、モンゴル、ウランバートル市、2021年）
©Injinaash, Bor

周縁から世界の矛盾を叫ぶ

さらにいうならば、ヒップホップの世界的な広まりは、人間社会の矛盾がグローバルに共有されていることを意味するのだといえよう。ニューヨークのブロンクスで起きた問題は、ロンドンのイーストエンドやウランバートルのゲル地区で起きている諸問題と共鳴するわけである。

そこで本特集では、世界各地のヒップホップの実践を文化・社会的背景をふまえながら、眺めていきたい。アフリカのカメルーン、インドネシア、東欧のセルビア。気鋭の研究者たちがそれぞれの国のストリートで生起するヒップホップ文化を紹介していく。今やヒップホップは世界を映し出す鏡なのである。

「なぜ？」
――カメルーンを生きる者たちの届けられない歌

矢野原（やのはら）佑史（ゆうし）
京都大学アフリカ地域研究資料センター特任研究員

「ラップはアフリカで生まれ、アメリカで成長した。やがて世界を巡り、ブーメランのようにアフリカへと戻ってきたのさ」。セネガルの著名なラッパー、ファーダ・フレディのことばである。アメリカ発祥の音楽であるヒップホップ／ラップは、アフリカの一部の若者にとっては「我々の音楽」と感じられるという。アフリカ各地の音楽／口頭伝承文化とヒップホップ／ラップの構造的親和性の高さが、ラップを実践する際にラッパー自身の肉体をとおしてまざまざと感得されるのだ。しかし、「アフリカ」とひとくくりにできないほどアフリカのヒップホップは音楽的・言語的に多様でもある。

例えば、わたしの調査地カメルーンは、仏語・英語を公用語とするバイリンガル国家だ。独立・併合前にフランス領とイギリス領にわかれていたためである。さらにピジン英語や二五〇以上の現地語も地方によって適宜使いわけられる。都市部では、現地語・仏語・英語の混成語であるカムフラングレ（Cam-fra-nglé）という若者ことばまで編み出され、カメルーンのラッパーたちによる楽曲ではその多言語性がカラフルに立ち現れる。歌詞内容には、ときに放送禁止となるほど過激な性的メッセージが含まれていたりするので、一見自由にメッセージを発しているように見える。だが、彼らがなかなか歌おうとしないテーマがある。政府批判である。これまでに、弁護士、教員、ラッパー、ＤＪを含む数百人を超える政府批判者たちが容赦なく投獄されてきた。カメルーン現大統領のビヤがその座に就任したのは一九八二年のことで、度重なる法改正によって在職期間と政治力を維持し続けてきた。

前回の大統領選挙がおこなわれた二〇一八年一〇月末、わたしは仏語圏（元フランス領）にある首都ヤウンデでラッパーたちの調査をおこなっていた。ラジオ、テレビ、ＳＮＳだけでなく、乗合タクシーやスラムのなかでも政治の話題でもちきりだった。その熱は、ヤウンデでの日常会話では避けられることの多い「アングロフォン危機」の話題にまでおよんでいた。アングロフォンとは、元イギリス領で暮らしてきた英語話者のカメルーン人のことで、人口はカメルーン全体の一四パーセントにも満たない。二〇一六年以降、英語圏カメルーンの弁護士・教員たちが中心となり、司法・教育・労働の場で直面する不平等を訴えるデモをおこなってきた。政府はその都度、軍を派遣してときに強制的にデモを阻止してきた。そこへ英語圏カメルーン独立を唱える分離派や、差別主義者も加わり、虐殺にまで発展する惨事が繰り返されてきたのだ。これまで約四〇〇〇人の市民の命が失われ、推定七六万人以上の人びとが国内外で避難民となっている。

ここで、大統領選挙期間中に聞き取りをおこなったアングロフォン・ラッパーのエピジムと、フランコフォン（仏語話者）・ラッパーのブラック・ジェームスによる楽曲「なぜ？（WHY?）」の歌詞の一部・要約を紹介したい。制作当時は周囲の人びとが彼らの身を案じたため、公開できなかったものである。わたしがラップを乗せるビートの制作を担当し、フランコフォンのＤＪミスター・ンドンゴのスタジオにて録音された。

スラムの長屋の一室での楽曲制作（2018年）

エピジム（左）とブラック・ジェームス（右）（2018年）

エピジム

一体どういう国家なんだ？／国民は嘆きを体験している／すすり泣きと叫び声が今の国歌だ／美しさを失ってゆく美しい国／乾燥した骨のような政治家たちのせいだ／彼らをアイコンのように奉ってはならない／そもそも英語話者・仏語話者になぜ分かれている？／宗主国の「遺伝学」による植民地時代の「染色体異常」だって知らないのか？／お前自身の倫理をチェックしろ／俺たちは手を取り合って相乗効果を生むべきだ／誰にもお前のエスニシティは手放させるな／なぜ民族主義を実践する？／なぜ民主主義を実践できない？／なぜ大統領制が君主制になっている？／なぜ権力は永遠でないと理解されない？／なぜ英語圏で銃弾が飛び交っている？／なぜ自国内で避難民となっている人びとがいる？／なぜ？

ブラック・ジェームス

人びとが死んでいく／やつらは無視している／虐殺を止めろ／虐殺を止めろ　今／調和を与えろ／生きるチャンスを与えろ／人びとが行方不明になっていく／やつらは俺たちの人びとを殺していく／毎日毎晩　俺は心にあることを言う／ひとつになれ　分かれようとするな／子供たちは学校に行けないでいる／子供たちが遊ぶための場所で銃声が鳴る／子供たちの間でも部族化が進む／子供たちは言う／お前は英語圏出身なのか！／お前は仏語圏出身なのか！／お前はバメンダ出身なのか！／お前はバッサ出身なのか！／お前はフラニ出身なのか！／お前はバコシ出身なのか！／毎日毎晩　俺は心にあることを言う／ひとつになれ　分かれようとするな／俺らは非常事態の中にいる　今／でもなぜ？／システムに尋ねよう／なぜ？

←歌詞の全文と音源は以下のURLもしくは左の2次元バーコードで
https://soundcloud.com/user-590956987/why-epijim-blackjames

最後に、本稿掲載にあたりおこなったオンライン・インタビューからブラック・ジェームスの一言を添えたい。

「俺はフランコフォンの両親の元、英語圏で生まれ育ち、アングロフォンの教育を受けて育った。父は、アングロフォンのコミュニティーと親しくしていたために『分離主義運動支援者』という虚偽のレッテルを貼られ、反逆罪を理由に軍から拷問を受けた後、行方不明となった。

俺はアングロフォン難民だけでなく、混乱の最中で命を落とした警察たちやその家族のためにも歌っている。この楽曲をとおして調和を訴えたいんだ。俺は、俺自身の心をとおした歌だけを届ける」（二〇二二年六月二〇日）

インドネシア、拡張するラップ・シーン

金悠進（キム ユジン）
民博 機関研究員

本場アメリカの初期ヒップホップ文化は、荒廃地区（ゲットー）の貧困層の表現として生まれたが、インドネシアではむしろ富裕層の表現としてローカル化していった。多くのラッパーは経済成長の恩恵を受けた都市中間層の若者であり、ジャカルタの大学進学組でエリートである彼らがアメリカ文化の流行に敏感に反応し、ヒップホップを実践していったのである。その過程で、本場の社会的メッセージ性を自国の文脈に流用し、開発や格差、汚職に対してラップを通じて批判した。

第一世代
―インドネシア語ラップの創始者たち

インドネシア語ラップがヒップホップ文化として定着したのは一九九〇年代である。九〇年代は、パンクやメタルといった欧米のジャンルが流行し始めた時期であり、また、盤石といわれたスハルト権威主義体制の存続に陰りが見え始めた時期でもある。

一九九五年はインドネシア語ラップの元年となった。ヒップホップの始祖とされるイワK（ケー）（Iwa K）がラップ史上もっとも有名な歌「自由（Bebas（ベバス））」で商業的に成功した年であり、また、第一世代のラッパーたちによるオムニバス・アルバム「ラップ・パーティ（Pesta Rap（ペスタ ラップ））」がヒットした年である。こうした人気の高まりを不快に思ったラップ嫌いのハビビ元大統領（当時政府高官）は「ラップは芸術的価値のない下品な音楽であり、我が国の文化に悪影響を与える」と苦言を呈したが、インドネシア語ラップの創始者たちはそんな圧力にも屈せず、ヒップホップ文化の定着に尽力し続けた。

第二世代
―民主化とシーンの多様化

一九九八年の民主化はラップ人気の上昇を後押しし、サイコジ（Saykoji）など新世代ラッパーの成功と第一世代の作風の継承、同国におけるヒップホップ文化の定着に寄与した。こうしたジャカルタを中心とする音楽産業の発展の一方で、多様なラップ実践が第二世代であらわれた。第三都市バンドンで結成したホーミサイド（Homicide）は、開発独裁期（一九六七年～一九九八年）に禁じられた共産主義思想を表現する急進左派集団であり、反逆の詩人の詩をラップしたり、実際に反政府デモに参加するなど、屈指のポリティカル・ラッパーとして名を馳せた。

同じく地方を拠点とし、ジョグジャカルタを代表するジョグジャ・ヒップホップ・ファンデーション（Jogja Hip Hop Foundation）は、ジャワの伝統衣装（バティック）や楽器（ガムラン）を用い、ジャワ語ラップを国内外に広める先導者となった。さらに女性ラッパー、ヤッコ（Yacko）は性暴力反対を掲げ、男性中心的な音楽業界に鋭い批判を示し、次世代女性ラッパーの活躍の先陣を切った。

バンドンのヒップホップ集団ホーミサイドのMC、ウチョック（Ucok、左）とわたし（右）（提供：Frans、2019年）

第三世代
―インターネットとシーンの相乗

そして二〇一六年以降、第三世代が登場する。ラーメンガール（Ramengvrl）は今もっとも有名な女性ラッパーだ。「糞女（くそ）どもがわたしをブスとよぶ。いいよ、わたしにはカネがある」と強烈な歌詞でルッキズム（容姿に対する差別）に抵抗する。彼女はジャカルタのヒップホップ集団を拠点にして活動の舞台を広げたが、他方でそうした共同体文化を傍目（はため）にスターダムを獲得したラッパーもいる。

当時一六歳であったリッチ・ブライアン（Rich Brian）は、初めての自作曲をYouTubeに公開するや否や一億回以上の再生回数を記録し、国内ではほぼ無名のまま本場アメリカで大注目を浴び、世界ツアーを実現した。アメリカのレーベル「エイティエイトライジング（88rising）」に所属、ロサンゼルスに拠点を移して、グローバル・スターとなった。

一方、国内限定で「バズった」のはヤング・レックス（Young Lex）だ。彼はYouTuberと共演し、「YouTubeはテレビより人気」と挑発したり、単調なライム（韻）でヒップホップ文化に対するリスペクトを欠いたりと、賛否両論の問題児として脚光を浴び、貧乏人から超セレブへと大出世した。両者は表現の質や方向性は異なるが、共通しているのは、第一世代のような大学進学組ではなく、非インテリながらインターネットというあらたなツールを通じて英語やラップを独学で体得し、一気にトップまで上り詰めたことだ。

こうした多様なスター性、カリスマ性を備えた新世代ラッパーを輩出する音楽大国インドネシア、わたしは今この底なし沼にハマっている。

ジャカルタのカフェ兼イベントスペース「MONDO」店内のグラフィティ・アート（2016年）

大型フェスティバルでライブをするペーパークリップ（Paperclip）。「ラップ・パーティ」にも曲を提供している（ジャカルタ、2017年）

セルビアにおけるヒップホップ史概観
――リアル、ローカル、仮想敵

上畑史
人間文化研究機構本部 人間文化研究創発センター研究員
東洋大学アジア文化研究所 特別研究助手

バルカン半島に位置するセルビアにおいてヒップホップは、「ターボフォーク」として知られる民俗調ポップスと人気を二分する音楽ジャンルとなっている。例えば「セルビア・レコード組合」発表のYouTube再生回数に基づく二〇二一年四月期トップ10（https://www.uds.rs/top-40-najslusanijih-pesama/）には、ヒップホップ五曲、ターボフォーク二曲、さらにラッパーとターボフォーク歌手のデュエット三曲が含まれる。結婚式などでも聴かれるターボフォークが幅広い世代に受容される一方、ヒップホップはおもに若者に支持されている。だが、ヒップホップがメインストリームに浮上したのは二〇一〇年代以降であり、それまでは周縁的な音楽文化だった。

混乱した時代のセルビア・ヒップホップ
――対抗文化としての展開

セルビア・ヒップホップの萌芽は社会主義下の一九八〇年代初頭に遡る。そのころ、体制や社会をシニカルな視点でパロディ化していたロック・ミュージシャン（Disciplina kičme他）によってラップが試みられた。八〇年代末にはヒップホップ・グループ（Badvajzer他）が結成され、ロック寄りの「デフ・ジャム」的な作風の楽曲がリリースされ始めた。九〇年代には暴力的な日常や荒廃した社会を描写するギャングスタ・ラップが主流となる。当時ユーゴスラヴィア紛争と社会主義終焉により無法地帯化したセルビアで、ラッパーたちはそのあらたなスタイルに自らを見出だした。

なかでもバッド・コピー（Bad Copy）は、酒・ドラッグ・「ビッチ」を好む、野蛮で退廃的な自己像を創り上げた。じつのところ彼らは、逸脱的な自己像を通じて、当時、依然として持続していた社会主義的価値観に挑戦していた。同時に、矛盾するようではあるが、九〇年代セルビアで活発化した反社会的行為と結びついた拝金主義的文化（同文化は、九〇年代の反社会的な若者たちが好んで着用した服飾ブランドのひとつDIESELに因んで「ディーゼル文化」とよばれる）、あるいはそれに同調的なターボフォーク一辺倒の大衆文化を「野蛮」とみなし風刺していたのである。こうしたヒップホップはおもに都市部に暮らす高学歴の若者から熱狂的な支持を得たが、普段ターボフォークを聴いているような大多数の若者の共感は得られなかった。このようにヒップホップはロックに代わって体制やメインストリームに対抗する音楽文化とされ、こうした見方は二〇〇〇年代にも維持された。

二〇〇〇年代にその中心的役割を担ったグループのひとつが、ベオグラツキ・シンディカトゥ（Beogradski sindikat）である。同グループは政治腐敗を糾弾するだけでなく、セルビアからのコソヴォ分離独立などと連動した排外主義的言説も開陳した。こうしたラップは民衆心理を代弁していたが賛否両論もよび、一部の放送メディアではボイコットされた。

一方で二〇〇〇年代には、一部のラッパーたちがモラリスティックな文化ではなく、リアリティをもった若者のストリート文化となりうる、ローカルなヒップホップを模索し始めた。彼らは、若者が普遍的に関心を寄せる恋愛、物質的豊かさ、飲酒、ナイトクラブ、肉体改造といったモチーフを、ローカルな要素としてのディーゼル的世界観やターボフォークの音楽・文化とあえて融合させた。こうした手法に先駆的に取り組んだラッパーのジュース（Juice/Dus）はターボフォーク側から歓迎されたが、ヒップホップのコア層からは冷遇された。

ジュースのアルバムCD「親愛なる友よ」
（*Brate minli*, 2006, City Records ©Ivan Ivanović）

新世代ラッパーたちの登場
――セルビア・ヒップホップのメインストリーム化

二〇一〇年代に入ると、九〇年代をほぼ記憶していない新世代の流入によってヒップホップ・シーンは変貌する。ディーゼル文化やターボフォーク文化にネガティヴなイメージをもたない彼らは、これらをローカルなストリートに根ざした「リアルな」ヒップホップの徴として受け止めた。この承認がヒップホップ・シーンの裾野を広げ、大衆化に繋がった。

もちろんセルビア・ヒップホップが、モラリスティックなそれと断絶したわけではない。例えば「仮想敵」の設定にも連続性を見出だせる。かつては国内の支配的文化や政治家などが設定されたが、最新のそれは「ヨーロッパ」である。セルビアはEU、NATOのいずれにも加盟しておらず、九〇年代にセルビア空爆をおこなった欧米への反発は依然として強い。新世代のラッパーたち（CobyやCrni Cerak他）は、「安定したヨーロッパ」を仮想敵としつつ「血みどろのバルカン」にしばしば言及し、ディーゼル的世界観をアップデートしている。

上：楽曲に民俗音楽の要素を用いることも多いラッパーのツォビ　©Bassivity promo
下：SNSを通じ、10代を中心に若者の支持を得ているツルニ・ツェラク　©Bassivity promo

右：今なおカリスマ的な人気を誇るバッド・コピー（提供：Bad Copy）
上：バッド・コピーのアルバムCD「ビールジョッキ」（*Krigle*, 2013, Mascom Records）

みんぱく回遊

街角の雰囲気醸すキオスク

小林直明
民博プロジェクト研究員

かれこれ四半世紀も前のことになるが、筆者はタンザニア・ダルエスサラームにて、キオスクの「一切しらべ」をやったことがあった。対象は当時住みこんでいた家の近くにあった小屋タイプのキオスク、店主は商売上手で知られるチャガの青年だった。当時ヘビースモーカーだった筆者は、タバコを買いによくこの店へ立ち寄った。青年の名前はピーター。ボブ・マーリーの大ファンで、彼のバンドのギタリスト、ピーター・トッシュとファーストネームが同じだからか、トッシュというあだ名でよばれていた。トッシュは同郷の親友であるチンガとともに、このキオスクのなかで寝起きして、家賃と夜警を雇うコストを節約していた。チンガはトッシュのキオスクの傍らでトレンチタウンという名前の靴磨きの店を営んでいた。ジャマイカのスラム街にちなんだ命名だ。チンガの店はよく繁盛していた。穴ぼこだらけの未舗装道路ばかりなので、靴がよく汚れるし、傷みも早く、メンテナンスの需要があるからだ。ラスタマンのような風体のチンガは、黙々と仕事をこなす働き者だった。引っ切りなしに来店する客たちは靴が仕上がるまでの時間、トッシュのキオスクで買ったタバコをふかしたり、他の客がおいていった新聞を貪り読んだりしながらおしゃべりに興じる。おもな話題は、サッカーの勝敗、選挙や政治のゆくえ、うまい儲け話、性生活など……。自分の客が相手の客にもなるという共存共栄の関係が成立しているように見えた。

調査での発見であるが、二畳分ぐらいの広さの店舗で三六品目（六一種類の商標）の商品が販売されており、大卒公務員初任給の一・五倍ほどの収益をあげていることがわかった。商品に値札はついていない。だいたいの相場は常識として共有されているが、最終的な売値は買い手との関係性によって決める。常連客にはつけ払いも許していた。

Ⓐ キオスク（ガーナ、H0205092）

トッシュ（ピーター）のキオスク。手狭になった店を建て替えたばかり。青ペンキの壁塗装にこだわりがあるらしかった（タンザニア、ダルエスサラーム、1996年）

まるごと展示の意義

みんぱくのキオスクを取材すべく、アフリカ展示の「都市に集う」セクションへ足を運んでみた。前述の調査とほぼ同時期の一九九六年に、ガーナの首都アクラで収集されたものだ。ここには他にも、コートジボワールの首都アビジャンの床屋やカフェテリア（二〇〇五年収集）など、現地で実際に使われていた店舗や手書き看板などが展示されている。店をまるごと運んで来て展示するなんて！　何とも大胆な発想である。収集時期や地域、来歴の異なる標本によって「仮想のアフリカの街角」が巧みに演出されているように感じられた。

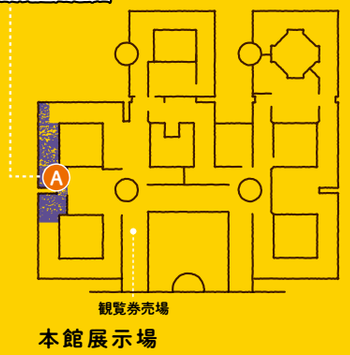
キオスクはフロアにポンと置いてあるので、営業中の売店と錯覚して、ついつい「お店の人」を探してしまいそうになる。現地で買い物する人の視点を疑似体験できるおもしろい展示だ。標本に近寄って、細部を観察してみる。間口一メートルぐらいのコンパクトな店舗である。腰丈ほどの木製テーブルの上に商品を陳列するための壇が五段ほど設えてあり、その上部には商品を熱帯の強い日差しやにわか雨から保護するためだろう、少し大きめのトタン屋根がついている。屋台タイプとでもよぶのが適当であろうか。小屋タイプは戸締りすると商品の保管庫になる。トッシュのキオスクは、住居でもあった。一方屋台タイプは閉店時、商品をどこか別の場所に移動しなければならない。広いスペースを得ることが難しい中心街での営業に向いているタイプといえよう。売り子は必然的に通いとなる。

この標本の秀逸なところは、これが収集されたときに並んでいたと思われる商品ごと保存・展示されている点であろう。ここで品目を列挙することはしないので、みなさんぜひご自分で現物を観察していただきたい。よくぞまあこんな小さな屋台に、バリエーション豊富な商品を陳列することができたものだと感心することだろう。チョコレート飲料のミロのパッケージにデザインされているスポーツ選手が黒人である点がアフリカっぽいが、商品はどれも世界中どこにでもあるようなファクトリーメイドの製品ばかりである。商品単体では民族学博物館の標本資料にはなりえないように思われるが、それらが販売されていた状態（文脈）ごと展示されることになると話が違ってくるのが実に興味深い。

陳列台のいちばん手前の目立つところに、小さいビニール袋で小分けにされた白と水色の粉末が並べられている。それぞれ、食塩（もしくは砂糖）と洗濯洗剤だと思われる。購買力を必ずしも十分に持ち合わせていない庶民でも購入しやすいようにとの配慮であろう。こういった些細な部分に商習慣の一端、消費行動のリアリティを垣間見ることができる。

このキオスクの前では日々どんな人びとが、どんなやりとりを展開していたのだろうか。これがまだアクラにあったときのことに思いを馳せながら、展示場を後にした。

靴磨きのチンガの店、トレンチタウン。靴底の張り替えなどの修理もお手のもの（タンザニア、ダルエスサラーム、1996年）



Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

INFORMATION みんぱくインフォメーション

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

イベント予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event

特別展

『Homō loquēns『しゃべるヒト』——ことばの不思議を科学する』

「コトバ」が伝わるメカニズムとその多様性を、言語学、文化人類学、工学、医学、脳科学など50名を超える国内外の研究者が協力して、おみせします。

会期　9月1日(木)～11月23日(水・祝)
会場　特別展示館

◆関連イベント

連続講座　SpringX 超学校
みんぱく×ナレッジキャピタル
「コトバとつきあう」シリーズ

いろいろな角度からみたコトバ研究を紹介します。

第1回
ヒトとコトバと展示編
日時　8月9日(火)19時～20時
講師　菊澤律子(本館 教授)

第2回
音声の工学シミュレーション編
日時　9月2日(金)19時～20時
講師　吉永司（豊橋技術科学大学 助教）

第3回
身体の違いとコトバの多様性編
日時　10月7日(金)19時～20時
講師　中島武史(兵庫教育大学 講師)

第4回
英語学習の脳科学編
日時　11月4日(金)19時～20時
講師　尾島司郎(横浜国立大学 教授)

参加形式
ナレッジキャピタルYouTubeアカウントよりオンライン(ライブ配信)で視聴
※申込不要、参加無料
※詳細は本館ホームページをご覧ください。

主催　一般社団法人ナレッジキャピタル
　　国立民族学博物館

みんぱく映画会
「シニエ——手話を話す」

イスラエルで制作された、手話に関するドキュメンタリー映画。手話の継承や翻訳、新しいコミュニケーションの世界をのぞいてみましょう!

日時　10月8日(土)13時30分～15時50分(13時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員200名)
総合司会　吉岡乾(本館 准教授)
司会　相良啓子(人間文化研究機構・民博)
解説　Sara Lanesman(イスラエル手話講師)
　　森田明(明晴学園 教頭)
※事前申込制(代表者を含む2名まで)、先着順、参加無料(要展示観覧券)
※事前申込の方へ入場整理券を当日11時から本館2階会場入口にて配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
■友の会電話先行予約(定員40名)
8月29日(月)～9月2日(金)
【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
■一般受付
9月5日(月)～30日(金)

ワークショップ
方言版異言語脱出ゲーム
琉球語編『紡がれるもの——おじいとおばぁと僕の物語』

琉球諸島をテーマに各地の方言や文化を織り交ぜた謎を解く方言版異言語脱出ゲームです。

日時　9月11日(日)
会場　本館第4セミナー室ほか
対象　本公演初プレイの方
※事前申込制(先着順)／参加無料
※申込及び詳細はこちら(異言語Lab. https://www.igengoescapegame.com/)。

主催　国立民族学博物館
　　国立国語研究所
　　一般社団法人異言語Lab.

ワークショップ
異言語脱出ゲーム 日本語手話編
「うしなわれたこころさがし」

ろう者のアテンドと手話、身振り、絵、様々なコミュニケーションで謎解きをし、ミッションをクリアしていくゲームです。

日時　10月9日(日)、10日(月・祝)
会場　本館第5セミナー室ほか
対象　手話を知らない聴者・本公演初プレイの方
参加費　前売りチケット1名につき4500円(中学生～大人)
※特別展招待券付き。詳細は左記の異言語Lab.の公式サイトをご確認ください。
※事前申込制(先着順)
※申込及び詳細はこちら(異言語Lab. https://www.igengoescapegame.com/)。

主催　一般社団法人異言語Lab.
　　国立民族学博物館

企画展

「海のくらしアート展——モノからみる東南アジアとオセアニア」

東南アジアやオセアニアの島や沿岸部にくらしてきた人びとの漁具や船具、儀礼具や装飾品にみられる海とのかかわりを、そのアート(美術)性にも注目しつつ紹介します。

会期　9月8日(木)～12月13日(火)
会場　本館企画展示場

◆関連イベント

ワークショップ
「海のくらしの手工芸——パンダナスで編むものづくり」

企画展を見学したのち、パンダナス(アダン)の葉を編んでコースターまたは土瓶敷きをつくります。「海のくらし」を体験してみましょう。

日時　9月18日(日)、19日(月・祝)
　　午前の部　10時30分～13時
　　午後の部　14時～16時30分
※1日2回実施
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)、企画展示場、オセアニア展示場
講師　小野林太郎(本館 准教授)
　　ピーター J. マシウス(本館 教授)
指導　池原美智子(石垣島やちむん館 工房 館長)、ほか一名
対象　小学5年生以上
参加費　各回500円(一般・大学生は要展示観覧券)
持ち物　汚れてもよい服装
※事前申込制(先着順、各回定員12名)
※申込フォームまたは往復はがきにて。1通につき2名まで応募可能。

【申込期間】
8月18日(木)から
定員になり次第、受付終了

みんぱく映画会

第52回みんぱくワールドシネマ
「ムンナ兄貴とガンディー」

インドで社会現象となった傑作コメディを上映。ラジオDJに恋するやくざの親分ムンナ兄貴が、ガンディーに取り憑かれた!? ガンディーの幻に導かれるまま、人助けをする兄貴とDJの恋の行方をご覧ください。

日時　9月24日(土)13時～16時15分(12時30分開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員200名)
解説　杉本良男(本館 名誉教授)
司会　松尾瑞穂(本館 准教授)
※事前申込制(代表者を含む2名まで)、先着順、参加無料(要展示観覧券)
※事前申込の方へ入場整理券を当日11時から本館2階会場入口にて配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
■友の会電話先行予約(定員40名)
8月15日(月)～19日(金)
【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
■一般受付
8月22日(月)～9月16日(金)

巡回展

国立民族学博物館コレクション
「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」

会期　9月11日(日)まで
　　会期中無休
会場　石川県立七尾美術館
　　第1・2・3展示室
主催　石川県七尾美術館(公益財団法人七尾美術財団)
　　国立民族学博物館
　　公益財団法人千里文化財団

受賞

第37回大同生命地域研究賞受賞

本館の山本紀夫名誉教授が、多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献したとして「大同生命地域研究賞」を受賞しました。また、卯田宗平准教授が地域研究の分野で新しい展開を試みるとともに、今後さらに活躍が期待されるとして「大同生命地域研究奨励賞」を受賞しました。

日本デザイン学会
2021年度年間作品賞受賞

本館の日髙真吾教授が、共著者の冨本浩一郎氏(山口大学)及び平井康之氏(九州大学)とともに、論文「国立民族学博物館触知案内板のデザイン開発」を対象として、日本デザイン学会2021年度年間作品賞を受賞しました。デジタル触地図(国立民族学博物館触知案内板)は本館の展示場に3台設置されております。

ビデオテーク新番組

本館2階インフォメーション・ゾーン(無料)のビデオテークブースとみんぱくシアターにて順次公開予定です。

番組番号	タイトル	監修
7062	宗廟祭礼楽：韓国の雅楽	櫻井哲男
7065	大韓民国全国民俗芸術競演大会	櫻井哲男
7115	面打ち：京都の能面師	黒田悦子、吉田憲司
7123	石崎奉燈祭：石川県・七尾市	八杉佳穂、笹原亮二
7252	それでも獅子は旅を続ける～山本源太夫社中 伊勢大神楽日誌～	山中由里子、神野知恵

みんぱくゼミナール

会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)
※定員200名
※事前申込制(先着順)、参加無料
※当日参加受付あり(定員40名)

第524回
8月20日(土)13時30分～15時(13時開場)
ソースコミュニティを敬う博物館活動
講師　伊藤敦規(本館 准教授)

【申込期間】
■一般受付　8月17日(水)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。

第525回
9月17日(土)13時30分～15時(13時開場)
モノからみる海のある暮らし——東南アジア・オセアニアの漁具・舟具・装飾品
講師　小野林太郎(本館 准教授)

海域世界となる東南アジア島嶼部(とうしょぶ)やオセアニアには、さまざまな漁具や舟、貝などの海産資源を素材とする装飾品があります。両地域での共通性も高いこれらのモノ達から見えてくる人類と海の歴史・文化について紹介します。

【申込期間】
■友の会電話先行予約
8月15日(月)～19日(金)
(定員40名)

【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付　8月22日(月)～9月14日(水)

みんぱくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

会場　本館第5セミナー室(定員42名)
※申込不要(当日先着順)、参加無料(要展示観覧券)、14時より整理券配布
※各回、開始30分前に開場

8月28日(日)14時30分～15時30分
ソースコミュニティに優しい資料画像の公表プロセス
話者　伊藤敦規(本館 准教授)

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話　06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form

友の会

友の会講演会

参加形式
①本館第5セミナー室(定員96名)
②オンライン
会員：無料
一般：500円(会場参加のみ)
※オンライン聴講ならびに会員以外の方のご参加には事前申込が必要です。お申込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

第527回　8月6日(土)13時30分～15時
探検、博物学、強制収容——朝枝利男とアメリカ
講師　丹羽典生(本館 教授)
第二次世界大戦に際して日系アメリカ人が強制収容されてから80年がたちます。探検家・朝枝利男も収容所で過ごした経験をもつひとりでした。本講演では民博のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトにおいて精査を続けてきた朝枝利男コレクションを取り上げ、朝枝のまなざしをとおしたアメリカでの体験を紹介します。
受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/527tomo/

第528回　9月3日(土)13時30分～15時
【特別展「Homō loquēns『しゃべるヒト』——ことばの不思議を科学する」関連】
伝わらないことば
講師　吉岡乾(本館 准教授)
言語は意思伝達に用いられる、ヒト特有の道具です。動物の意思疎通ツールと異なり、言語の特性のひとつに、無限の表現を作り出せるし理解もできる、「創造性」があります。言語によって表現できない考え、伝えられないメッセージは、原則的にありません。それなのに、世の中に伝わらないことばが間々あるのは何故なのでしょうか。
受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/528tomo/

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話　06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

○○してみました世界のフィールド

フィールドワークと食

岡田恵美
民博 人類基礎理論研究部

農村の台所。竈を囲んで食事をする（ナガランド州、ティプズ、2022年）

民博に在籍する研究者の多くは、研究の基盤をフィールドワークにおいている。つまり調査地に赴き、現地の人びとと交流しながら知見を得る。したがって、研究者には現地の社会や文化、人びとに関する専門的な知識やローカルな言語の運用能力が必要である。と少し偉そうに書いてみたが、わたし自身はそうした知識や能力という面では未だ半人前の音楽民族学者である。だが一方で、現地の方々と円滑に対話するうえで恵まれた資質は備えているようだ。それは何か。それは、胃腸の強さと食への好奇心である。

ともに食べることから始まる

わたしが研究のフィールドとするインドでは、客人を一杯の水でもてなす慣習がある。調査の訪問先では、コップになみなみと注がれた水がまず差し出され、通過儀礼であるかのように、わたしはそれを直ぐに勢いよく飲み干す。たかが水、されど水である。これが煮沸水なのか、ろ過された水なのか、不安や葛藤が生まれる前に先手必勝だ。幸運なことに腹痛を起こしたことはない。そして水のコップが空になると、濃厚なミルクの膜を張った甘いチャイとお菓子が運ばれてくる。

多民族・多宗教国家のインドでは、地域によって食文化も多様である。近年わたしが調査で訪れている北東部のナガランド州には、ナガという山岳民族が多く暮らす。厳格な菜食主義者も多いインドだが、ナガは豚、牛、鶏、蛙、蚕や蜂の幼虫、魚やタニシなども食用とする。農村の調査では、天井から燻製肉がつり下げられた土間で、竈の周りに椅子を半円状に並べてともに食事をする。招待してくれる村人も最初こそ口数も少ないが、こちらが周りの食べ方を真似ながら次々と料理を口にし、食材や調理法について矢継ぎ早に質問すると、緊張もほぐれてくる。その後は、まるで実家に帰省したかのように次々と皿に料理が継ぎ足されていく。そして、お腹が満たされた後はどぶろくが振舞われ、わたしが研究対象としている歌が始まることも少なくない。

市場に並ぶ蜂の子や特産の唐辛子（ナガランド州、コヒマ、2022年）

現地の人びとともに食べてみました

食が想起させる甘酸っぱいインド留学時代

わたしは二十代半ばに首都デリーの音楽院に留学したが、そのころに口にしていたもののなかに今でも郷愁を誘う味がふたつある。

ひとつはバルフィーとよばれる生菓子である。これは煮込んだミルクと砂糖を板状に冷やし固めたもので、果物やナッツを含んで種類も豊富だ。なかでもカシューナッツが練り込まれたカジューバルフィーは、当時の貧乏学生には普段は手の届かない高級菓子であった。だが、ヒンドゥー教の祭日やベンガルの正月、イスラーム教の断食月であるラマダーンが明けた日、また自分の誕生日といった慶事は例外である。音楽院のクラスメイトたちは煌びやかな菓子箱に詰められたバルフィーを持参して、一人一人に配る。宗教や出身地域も異なる人びとが祝い事を共有するという当時の寛容な雰囲気とクラスメイトの顔が、今でもバルフィーを口にする度、その強烈な甘さやミルクとナッツの香りから浮かんでくる。

カジューバルフィーはミルクとカシューナッツの濃厚な風味（コルカタ、2022年）

もうひとつの懐かしい味はパーニープーリーである。デリーではゴールガッパーとよばれ、道端の屋台でおなじみのスナックだ。パーニーとは水を意味し、プーリーとは小麦の全粒粉などを薄くのばして揚げた、空洞の球状をしたスナックのことで、パリッとした食感が特徴である。屋台の売り子は、プーリーの上部に穴を空け、そこからマッシュポテト、ひよこ豆、刻んだ玉ねぎ、香辛料を加え、最後にタマリンドやコリアンダーで風味付けられた酸っぱい水や甘いチャツネを溢れる寸前まで流し込む。葉っぱを圧縮した自然素材の皿に置かれたパーニープーリーを、客は指でつまんで中身をこぼさないように口へと運ぶ。一個食べ終わると、椀子蕎麦のように売り子が間髪いれず二個目を皿に置くので、食べる側も忙しい。六個単位で提供される場合が多く、途中で自分流の配合を売り子に伝え、味の変化を楽しむことも可能だ。

このスナックの起源に関しては諸説あるが、マハーバーラタ神話に登場するパーンダヴァ家の新妻ドラウパディーが義母から残り物の野菜とわずかな小麦粉の生地しか与えられず、そこで編み出した料理だと語る者も多い。留学時代には、放課後に友人とこれを食べながら、屋台の周りで話し込み、こうした逸話もそんなときに教えてもらった。

二〇二二年四月、パンデミックを経て二年半ぶりにインドで口にしたパーニープーリーは、久々にフィールドワークができる喜びを湧き上がらせると同時に、甘酸っぱい学生時代の記憶を蘇らせた。

上：自然素材の皿とパーニープーリー（コルカタ、2022年）
下：客の好みを聞きながら手際よく配合する売り子（コルカタ、2022年）

みんぱくのいろいろなコレクションを紹介する新コーナーです

コレクション
あれこれ

成長し続ける梅棹アーカイブズ

飯田 卓（いいだ たく） 民博 学術資源研究開発センター

みんぱく内にある梅棹資料室では、アーカイブズ専属の担当者（アーキビスト）が資料の閲覧対応や一般公開のための整理をおこなっている

梅棹忠夫アーカイブズ　梅棹忠夫アーカイブズ　クリック

資料点数：約150,000点（目録化されているもの）
梅棹忠夫初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で収集・作成・撮影した資料群。フィールド・ノート、スケッチ、写真など現地調査で生成された資料のほか、さまざまな発想やアイデアをしるしたカード、手書き原稿など、生涯を通じた活動にかかわる資料のほとんどすべてが含まれる。全リストと資料の一部をWEB公開中。閲覧は研究・教育目的に限る。要事前申請。
http://nmearch.minpaku.ac.jp/umesao-archives/index.html

カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊でのフィールド・ノート（撮影：尼川匡志）

ひらかなタイプライター（オリンピア スプレンディッド33）

馬の手綱のスケッチ

研究アーカイブズ資料の多様性

みんぱくの研究資料は、文献図書資料、映像・音響資料、標本資料、研究アーカイブズ資料の四つに大別して管理されている。このうち研究アーカイブズ資料はやや複雑である。ふつうアーカイブズ資料といえば刊行物以外の文書類を意味し、手書き原稿や書簡、メモ類、カード類、フィールド・ノートなどを指すことが多い。

しかし、特に故人の持ちものがみんぱくに寄贈される場合には、膨大な写真や民芸品が併せて寄贈される場合も少なくなく、アーカイブズ利用の窓口である図書室とは違う部局で管理していることがある。

利用者がこのことを気にする必要はない。梅棹忠夫（うめさおただお）アーカイブズであれば、右の二次元バーコード（QR）のURLからサイトの指示に従って利用申請書に記入すればよい。これは、縦割り行政の不便を意識させない「ワンストップ・サービス」を心がけた結果である。あくまで研究利用を前提としているので、開架式図書室で手にとるような簡便さはないものの、整理をすすめながら順に利用の便に供している。

成長し続ける資料群

右URLのサイトをブラウザに表示して、上の方にある「全リストへ」というボタンをクリックしてみよう。膨大な梅棹アーカイブズの全貌がここに示されている。リストの後半、資料番号29〜33は図書類、34〜40は写真と音源、41は記録というよりモノというべき立体物で、前述の文献図書資料、映像・音響資料、標本資料に対応する。これらの資料の一部は、定期点検や破損の際の措置などをおこなう担当部局のもとで保管されているが、さまざまな理由でそうなっていない場合もある。

資料番号1と2も図書類だが、梅棹自身の著作である点が29〜33と違っている。資料番号3は図書の体裁をとっていないが、やはり梅棹の著作である。生前の著作が増刷されたり改訂版・新装版が出たりした場合、また他の文筆家の文章とともにアンソロジーに収められた場合など、梅棹の著作はいまだに増え続けている。

また、他の書き手が梅棹について書いた「引紹批言録（いんしょうひげんろく）」（資料番号4）も、まだ増加が鈍っていない。引紹批言録とは梅棹自身が生前に使っていたことばで、「引用」「紹介」「批評」「言及」のそれぞれ最初の文字をとって作った造語である。

梅棹資料室でインタビューを受ける梅棹忠夫。左は小山修三名誉教授。後ろ姿は秘書（当時）の三原喜久子氏（撮影：藤田京子）

いまだ知られざる資料群

学史研究者の関心をよぶのは、資料番号6から16あたりの資料群であろう。これらの資料のなかには、梅棹が執筆を準備する段階で書きためた自筆の記録もある（資料番号7の新聞きりぬきなどは例外）。版権や著作権の問題がないものは、資料閲覧の便のためにデジタル化を進めている。しかし、一部の写真と異なり、インターネット上で公開するには至っていない。資料のなかには私的な書簡のようなものも含まれていて、安易な公表が特定個人のプライバシー侵害（そして、場合によっては、秘儀公開などによる集団心理的ダメージ）となる場合があるからだ。資料閲覧の申請が届いたときには、専属の担当者（アーキビスト）が内容を確認し、問題のないものだけを公開している。

こうした事情もあって、研究アーカイブズ資料は原則的に、みんぱく館内のみで公開されている。インスタグラムのように写真を自由に閲覧・拡散できることを求める人もいるが、フィルム時代には写真の大量複製・大量拡散を誰も想像していなかった。つまり、写真はインターネット公開になじまないことがあるのだ。それでもみんぱくは、こうした問題を少しずつ解決しながら、資料利用の簡便化を進めている。整理と同時に一般公開を進めている点も、じつは梅棹アーカイブズの特徴である。

それでもインターネットで梅棹の写真を見てみたいという読者のために、ひとつお教えしよう。リストの資料番号34の「写真（撮影：梅棹）」の一部が、「京都大学学術調査隊写真コレクションデータベース」としてインターネット公開されている。次のURLからサイトに入っていただきたい。
https://htq.minpaku.ac.jp/pkuse/

上：現在においてもさまざまな雑誌や書籍で「引紹批言」され続けている
下：下山する梅棹忠夫（タンザニア、キリマンジャロ、京都大学アフリカ学術調査隊 第II期［1963年4月〜1965年3月］、X0239722）

Xからはじまる番号は本館の映像・音響資料番号です。

シネ倶楽部M

人気絶頂期に命を絶ったラッパー

若きカリスマ・

平井 ナタリア恵美　フリーライター

「お前は神だ」

原題：Jesteś Bogiem
2012年／ポーランド／ポーランド語／118分／DVDなし
監督：レシェク・ダヴィド
出演：マルチン・コヴァルチク、トマシュ・シュハルド、ダヴィド・オグロドニクほか

本作のメインビジュアル。「もしすべての人がお前を疑ったとしても、それが間違いだって見せてやれ」というマギクのリリックがしるされている
© 2015 Studio Filmowe KADR

左ページの写真は、マギクの死後におこなわれた、パクトフォニカの実際のライヴツアーの様子を収めたもの（撮影：ヴォイチェフ・ヴァン・ユシュキェヴィチ、2001年）
© Wojciech Van Juszkiewicz
1：バルトシツェでのライヴ風景。客席までラヒムがファンに歩み寄っている
2：ライヴ会場まで3本の電車を乗り継ぐ長旅に疲れを見せるフォクス
3：マギクの死後、初めてのパクトフォニカのライヴ。マギクのラップはカセットテープの録音から流していた

この画像はウェブサイトでは非掲載にしています。

ポーランド伝説のヒップホップグループの軌跡をたどる

本作は、アメリカから伝播したヒップホップ文化がポーランドに根づき始めた一九九〇年代後半にカルト的な人気を誇り、後に伝説的な存在となったヒップホップグループが成功に至るまでをたどる伝記映画である。映画タイトルは、本作の主人公であるマギク（Magik）、ラヒム（Rahim）、フォクス（Fokus）の三人のラッパーから成るグループ、パクトフォニカ（Paktofonika）の代表曲「俺は神だ」をもじったものだ。パクトフォニカの中心的存在であったマギクは、そのカリスマ性で多くの人びとを惹き付けたが、ファーストアルバム「キネマトグラフィア」をリリースした八日後、クリスマスの朝に自ら命を絶ってしまった。遺言は残っておらず、映画でも理由は語られない。この映画はむしろマギクという人物に寄り添うことで、見る人びとの想像力にそれをゆだねてくれる。

舞台は一九九八年のシロンスク地方にある工業都市カトヴィツェ。適当に毎日をやり過ごしていたヴォイテク・アルシェルは電子専門学校で、「ラッパーのマギク」として名が知られた存在だったピョトレク・ウシュチュに出会う。当時のマギクはカリベル44（Kaliber 44）というヒップホップ・ユニットで既に二枚のアルバムを発表していて、個性的なラップスタイルで人気を博していた。それまでテクノ・ミュージックに夢中だったアルシェルはマギクのラップを聞き、「ポーランド語でもラップすることは可能なんだ！」と衝撃を受けて、自らもリリック（ラップの歌詞）を書き始める。

MC（ラッパー）名フォクスを名乗るようになったアルシェルは、おりしも方向性の違いからカリベル44を脱退したマギクにあらたなユニットの結成をもちかける。そして、マギクは三人目のメンバーに既にラッパーとして活動歴があったラヒムを推薦し、パクトフォニカが結成されることとなった。

しかし、ヒップホップがまだまだアンダーグラウンドな音楽ジャンルであった当時、お金のない三人の若者にとっては普通に活動することすらままならない。なんとか取り付けたライヴでのパフォーマンスのおかげでレコーディングの話が舞い込み、三曲のオリジナル曲をレコーディングするが、支払いが十分されないまま音源をもち逃げされてしまう。さらに、マギクのガールフレンドが妊娠したことが発覚。マギクは結婚して生活を支えるために昼間の仕事につきながら、アーティスト活動を進めるようになる。

そんな折、レコード会社を設立したてのオーナー、グスタフから「パクトフォニカを世に出したい」という熱烈なアプローチを受け、彼のサポートのもとでアルバムを製作することに。パクトフォニカはMTV（音楽専門チャンネル）にも取り上げられ、ライヴを重ねるごとに人気を高めていくが、その一方で結婚生活が破綻していったマギクは孤独を深めていく……。

ポーランドの「灰色の時代」を背景に

パクトフォニカが活動した時代は、ポーランドで社会主義体制が崩壊した一九八九年から約一〇年後。民主化を果たしたものの、経済的にも政治的にも不安定だった九〇年代についてポーランド人に尋ねると、多くの人が「灰色で暗かった」と表現する。全体的に色味の少ないくすんだトーンで本作が描かれているのも、そういった時代背景を感じさせる要素のひとつだ。灰色という色は、多くの国民が住んでいた大規模団地のカラーでもあり、また不安定さや不満をあらわした色でもあるように思う。お店に商品がわずかしか並んでいなかった社会主義時代を生きてきた人びとにとっては、当時、資本主義の導入により登場した商業広告を異質にすら感じたようだ。映画のなかで、運転中に何度も遭遇する屋外広告にマギクが嫌悪感をあらわすシーンは、まさにそういった時代の変化と人びとの戸惑いを象徴している。

多くのファンや当事者がいるパクトフォニカの映画化が難しかったことは想像に難くないが、監督や俳優、スタッフが真摯に向き合って制作した結果、映画は高く評価され、大ヒットを記録した。国内で多くの映画賞を受賞し、実際にラップをこなした俳優たちの演技も高く称賛された。この映画はドキュメンタリー作品ではないが、パクトフォニカの活動の軌跡、そしてマギクの半生を淡々と客観的に描き、アーティストの苦悩や九〇年代の空気を見事に浮き彫りにした貴重な作品であるといえよう。

ことばの迷い道

言語学とーちゃん、娘のお友達の名前を勝手に分析

川原 繁人（かわはら しげと）
慶應義塾大学言語文化研究所教授

下の娘が幼稚園に通い始めた。娘が無事に家に帰って来ると「今日の幼稚園どうだった？」と聞くのが日課。「今日はね、『かがみさら』ちゃんと遊んだの」。先生が名字と名前を一緒に呼んで出席を確認するからであろうか、娘もお友達を名字＋名前で呼ぶ。そういえば、上の娘も同じことをやっていたな、と懐かしくなる。子どもの命名に悩む親御さんは多いと思うが、我々夫婦も大いに悩んだ。そして、周りのお子さんにどんな名前が付けられているのか気になってしまう。親としても言語学者としても。

言語学者としても……？　英語では複合語や氏名において、同じ音の連鎖が避けられるという研究結果を聞いたことがある。日本語の命名でも似たような現象が観察されるのだろうか。例えば、「らん」という名前。「かがみらん」なら座りが良いが「かわはららん」だとちょっとゴロが悪い気がしなくもない。日本の親御さんたちは、名前を選ぶときに、同じ音の連鎖を避けるのか。疑問が頭によぎってしまったら、実際に分析せずにはいられない。

方法は以下のとおり。まず、上の娘の卒園アルバムに載っている名前から、例えば「かわはら」の「ら」と「しげと」の「し」のように、名字の最後の音と名前の最初の音を抜き出した。「ん」で終わる名字などは除外し、残ったデータ数は153名分。実際に「名字の最後の音＝名前の最初の音」である名前は2例だけ。153分の2とはずいぶん低そうな値だ。上記の仮説は正しいかもしれない。しかし、この確率が偶然得られたものではないか確認しなければなるまい。そこで153名の名字と名前をランダムに組み替えて、「名字の最後の音」と「名前の最初の音」が偶然一致した組の数を数えた。そして、それを5万回繰り返す（もちろんプログラミングで自動化して）。結果、ふたつの音が偶然一致する組み合わせの平均値は2.64組、一致した組み合わせが2組以下だったものは、5万回のうちの50.6％にも上った。つまり、153分の2という値は、名字と名前をランダムに組み合わせても十分得られる低さだった。残念。

もしかしたらデータ数が少なすぎたのかもしれない。少しムキになってネット上にあったゴルフプロの名前970名分をあらたなデータとして分析してみた。方法は上に同じ。実際にふたつの音が一致する例は18例、約1.9％弱。シミュレーションの結果、音が偶然一致する組み合わせの平均値は22.3組で、現実の値の18組以下だったのは20.9％。残念、やっぱり現実の値は、偶然でも十分得られる程度の低さだった。

直感的には「かわはらん」のように同じ音がふたつ並ぶような命名は避けられるのかな、と思ったが、実際に分析してみたらそんなこともなかった。でも、まだまだ何か潜んでいる気もする。お、ちょうど娘が帰って来たようだ。「あ、今日は、むらかみみことちゃんと遊んだの？　楽しかった？」

『月刊みんぱく』は
国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（平日9：00〜17：00）
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく　2022年8月号

第46巻第8号通巻第539号　2022年8月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　園田直子
編集委員　三島禎子（編集長）　池谷和信　上羽陽子
岡田恵美　中川理　吉岡乾
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁ます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス紙 FSC® C013678
VEGETABLE OIL INK
GREEN PRINTING JFPI P-810282

月刊みんぱく

2022年
8月号

編 集 後 記

本特集では異なる地域のヒップホップやラップが紹介され、世界各地で独自の変化を遂げながら若者を中心として圧倒的な人気をもち、共通して社会的メッセージを発していることが見えてきた。わたし自身はこのジャンルの音楽にはあまりなじみはなかったが、ヒップホップやラップは音楽というより、もはや文化のひとつとして理解した方がよさそうだ。

そうしたときに、雑誌というものが文字を読むだけの機能では足りない時代になっていることを強く感じる。本年4月号の編集後記でも、本誌は「多機能雑誌」であることに触れたように、必要があれば二次元バーコード（QR）を挿入し、音声を聞いたり、詳細な情報にアクセスする手段を追加している。本号から始まった「コレクションあれこれ」のコーナーでもデータベースにアクセスするURLがこれから多く登場することであろう。

他方、宣伝はしていなかったが、本誌はDAISY（デイジー）図書を使って音声でも聞くことができる。もともと視覚障がい者への配慮として始めたものだが、文字離れの傾向が強い今日、音声による需要も増えるのではという期待もある。そのためには、書き手にとっても、耳からすっと入ってくるようなヒップホップやラップの言語感覚が大いに参考になるかもしれない。（三島禎子）

次号の予告 9月号

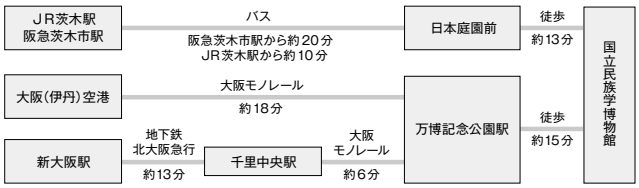
特集「コトバとつきあう」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151
開館時間　10:00〜17:00（入館は16:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は翌日が休館日）
年末年始（12月28日〜1月4日）

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

国立民族学博物館（みんぱく）の広報誌

『月刊みんぱく』定期購読のご案内

1年間お届けします！

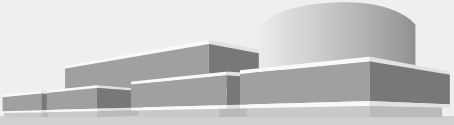
みんぱくの広報誌『月刊みんぱく』では、催しの情報のほか、世界各地の文化、衣食住の生活用品の展示、最新の民族学、文化人類学の研究について、研究者が親しみやすいエッセイやコラムで、毎月紹介しています。定期購読は年間をとおしていつでも始められます。ぜひこの機会に定期購読を始めてみませんか？

定期購読料：4,400円（発送手数料込）

こちらもオススメ！

『月刊みんぱく』が毎月届くほか、年間何度でも本館展示をお楽しみいただけるミュージアム会員へのご登録もおすすめです。

ミュージアム会員…**5,000円**（年会費）



お問い合わせ

定期購読、友の会のご利用は、国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話　06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX　06-6878-3716

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp